

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 六条から由良を歩く

講 師 大嶋 和則（高松市文化財専門員）

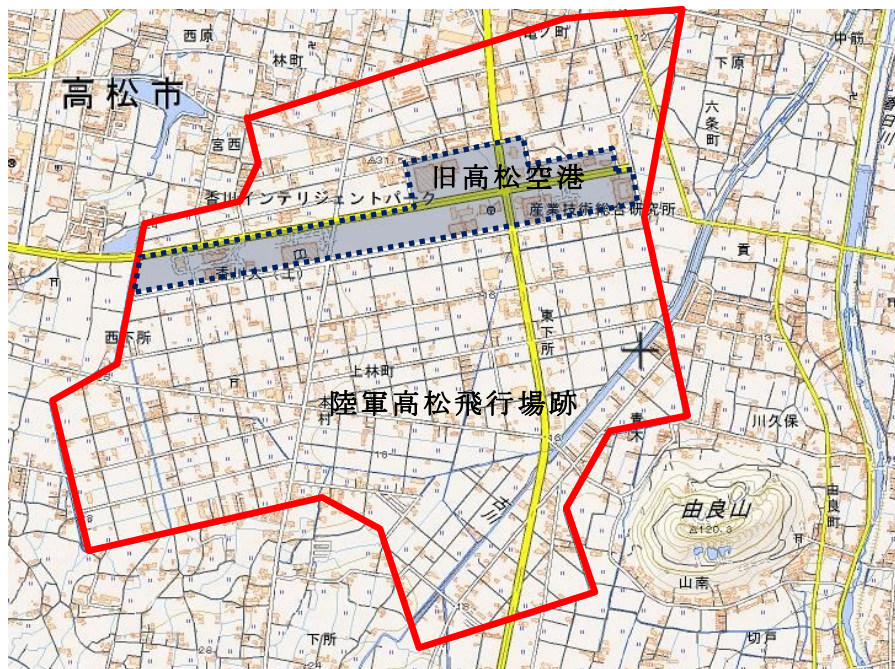
平成 2 8 年 1 2 月 1 8 日（日）

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 文 化 財 保 護 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 高松飛行場跡

第二次世界大戦も敗色の色が濃くなり、本土空襲も激化する中、陸軍は木田郡林村を中心に川島町・三谷村・多肥村にまたがる二七〇ヘクタールという広範な地に飛行場を造る方針を固め、昭和十九年（一九四四）一月二三日に香川県へ通達しました。林村では総戸数六〇〇戸のうち移転対象が二七五戸に達し、四月末までに移転が行われ、引き続き飛行場建設が行われました。これらの作業には勤労奉仕によるところが大きく、香川・木田・大川郡からの作業従事者がやってきました。

当初は民間業者によって工事が行わ



高松飛行場跡範囲図（<http://maps.gsi.go.jp>を一部改変）

れていましたが、戦局の悪化により緊急性が高まり、五月中旬に伊丹飛行場の第一四一野戦飛行場設営隊二〇〇人が駐屯し、軍直営で工事が進められました。八月には幅一五m、東西八〇〇mの東西滑走路が完成すると、整地がまだ不十分な中、九月には三重県の明野飛行場から隊員が入り、訓練が始まりました。中にはビルマ独立軍の士官四〇人もいました。

昭和二〇年二月、陸軍の方針により、本土決戦用として訓練にさしかえない範囲で飛行機を隠すことになりました。由良山には掩体壕（えんたいごう）飛行機の格納庫）が造られ、飛行場からは各所に向けた誘導路が造られました。同時に、敵の目をごまかすために、近郊の国民学校で竹や木で模擬飛行機を作りました。

三月二三日には沖縄戦が始まり、高松飛行場においても振武特別攻撃隊が編成され、幾人かが沖縄海域の米戦艦めがけて出撃をしていきました。六月には沖縄戦の終結を迎えると、本土への空襲はさらに激化し、高松飛行場の対空射撃部隊として独立高射機関砲第五九・六〇隊が配置されました。同部隊は林飛行場周辺のほか、由良山・日山・大池などにも高射砲陣地を築いていました。

七月四日には高松空襲により市内が壊滅状態になりましたが、飛行機の温存という軍の方針により飛行場からは一機も応戦に出ていません。その後、七月二二日と二四

日には高松飛行場も攻撃を受けました。特に二四日は米軍グラマン戦闘機一〇八機が来襲し、勤労奉仕に来ていた民間人一四人が死亡し、軍関係者にも多くの犠牲が出ました。

敗戦により、飛行場はアメリカ軍に接収され、本土決戦に温存された飛行機六一機は飛行場に集められ破壊されました。戦後、空港用地の南部は農地として開放されましたが、滑走路は連合軍が実施する終戦連絡用の国内定期飛行に使われ続けました。昭和二六年頃から林村民により、空港を全面開放し、元の農地に戻すという解放運動が始まりましたが、軍事基地反対や最大限の農地解放などの要求のもと、昭和三〇年には三三ヘクタールを残して空港が存続し、民間の航空会社による伊丹便が就航しました。翌年には空港整備法による第二種空港に指定されました。昭和三年には滑走路長一二〇〇mで供用を開始し、以後、平成元年（一九八九）に香南町に新高松空港ができるまで、「林の飛行場」の通称が使われていました。

その後、空港跡地は高松市の中心部に近いという立地条件を活かし、香川県は「香川インテリジェントパーク計画」に基づき、様々な産業支援機関や研究開発機関が集積し、産学官連携による研究開発・新規産業創出の拠点づくりが進められました。

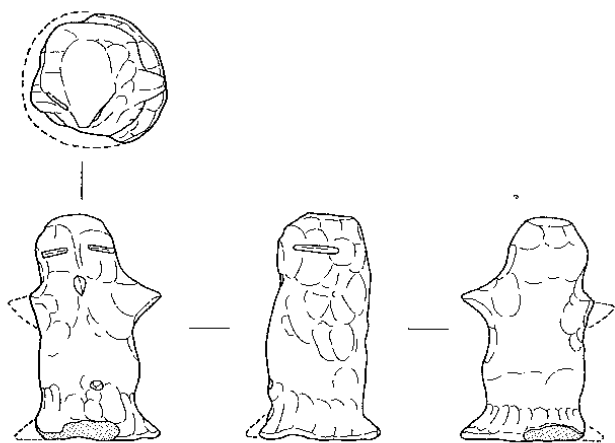
2 空港跡地遺跡

これまで空港跡地遺跡では縄文時代から近世に至るまでの遺構が確認されています。特に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては竪穴住居などをはじめとした集落が営まれていたほか、前方後円形、前方後方形、方形の周溝墓などが検出されています。

なお、林コミュニティセンター建設工事に際しても発掘調査が行われ、弥生時代終末期の遺物が多数出土したほか、陸軍の飛行場時の格納庫跡と推定される遺構を検出しました。

3 讃岐六条の水車及び関連用具

高松藩と関わりがあった河部氏が、仏生山法然寺の虫干し供養の素麺原料を製造するために「御用水車」として約三〇〇年前に作らせたと言われています。明確に記録に登場するのは明治三五年（一九〇二）二月で、河部百太郎から現所有者の祖父である高原



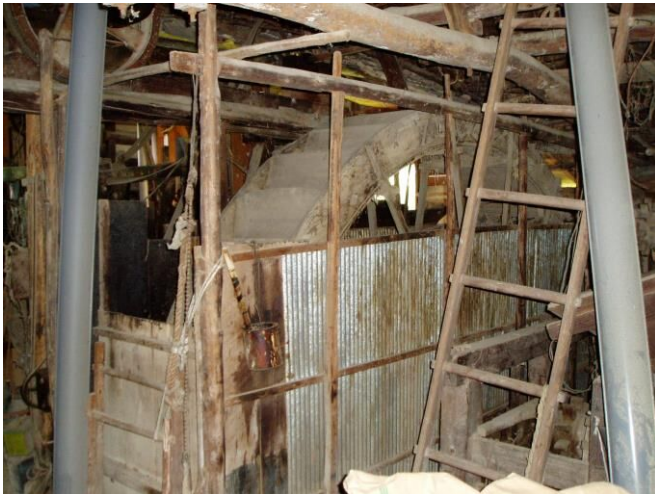
空港跡地遺跡出土人型土製品

太吉が購入しています。このため「高原水車」とも呼ばれ、平成一二年（二〇〇〇）まで周辺地域の製粉や精米、製麺等を引き受けてきました。

水車は敷地西側の用水路から取り入れた水を水路で水車小屋まで導水し、小屋内部で水輪を回転させた後、再び水路を経て東側の古川に排水するようになっていきます。

水車小屋は床面積約七四坪の木造寄棟造で、水路は地元産の由良石を用いており、幅は約一m、取水口から排水口までの総延長約七〇m、水輪前後の落差は約二mです。

水輪は、松材で中間よりやや上に水が掛かる胸掛け形式で、直径約四・八m、幅約六五cmあり、小屋内部の水路を約二m掘り下げて設置されています。水輪には、製粉や精米を行う二基の石臼、粉類を運搬するベルトコンベアー式の木製昇降機、ガンドと呼ばれる回転式の篩ふるいが連動しており、水輪の回転で生まれた力が、マンリキと呼ぶ櫟製の歯車を介して二基の石臼に伝えられて製粉や精米



水車

を行うと同時に、木製昇降機も動かしてガンドまで粉類を運び、ガンドを回転させて篩にかけ、さらにガンドに残った粗い粉を木製昇降機で石臼に戻して再び製粉するという仕組みです。なお、水力不足を補うため、明治四一年から発動機を併用して動力としています。

関連用具も多く残っており、押し麦機、製麵機などの機械類のほか、水車の予備の部品、水車や機械類を整備する用具、帳簿類など水車の経営に不可欠な書類もあり、整理されています。中でもうどんを打つ用具類は、讃岐平野の水車経営の特色をよく示しています。

我が国の水車には動力用と揚水用の二種があり、讃岐平野では製粉や精米等を行う胸掛け形式の動力用水車が主流で、特に明治時代以降、製粉・精米から製麵までを行う水車経営が盛んでした。讃岐平野に見られた水車の典型的な事例であり、渇水という気候条件に対応した用具やうどんを打つ用具類も収集されているなど地域的特色も豊かであることから、我が国の水車習俗や粉食文化を理解する上で注目されます。また、讃岐平野の水車は戦後急速に衰滅し、今日水車とその関連用具を一体的に整理・保管しているのは本件のみであり、希少な事例であることから今年国登録有形文化財に指定されました。

高原水車友の会も結成され、地道に水車の修復や用具の整理を行うとともに、毎月最終週の土曜日に公開が行われています。

4 由良山

讃岐平野には、台地状あるいは円錐状の美しい小山が点在しており、屋島などの山頂に広範囲で平坦に安山岩等の火山岩を頂くメサと、金山（坂出市）などメサ地形がさらに侵食して山頂に小規模に安山岩を頂くビュート、小山の山頂を安山岩などが貫入している飯野山（丸亀市）などの火山岩頸に区分されます。これらはいずれも約一三〇〇万年前〜一五〇〇万年前の瀬戸内火山活動でできた溶岩等（瀬戸内火山岩類）が、八〇〇〇万年前〜九〇〇〇万年前の領家花崗岩類中に貫入して、地上に噴出した後、一〇〇〇万年以上の歳月をかけて侵食された残丘です。

由良山は火山岩頸で、標高一二〇・三メートル、周囲三キロメートルです。黒雲母母デイサイト（由良石は安山岩であるとされてきましたが、二酸化ケイ素の比率からデイサイトに分類されます。デイサイトは過去には石英安山岩とされていきました。）かなり、柱状節理が見られます。

由良山の名称の由来は地震にも「揺らん山」だという説があります。由良山の麓の人たちの間では、由良山周辺は地震の際にあまり揺れないという言い伝えがあり、安政や昭和の南海地震の際にも被害が少なかったと言われています。揺れない山は「おじゃはん」が七巻り半もしていて、その尾は蔵王ざおう神社（由良町）まで延びているという伝承があります。「おじゃはん」とは大きな龍で、水の神様です。

黒雲母デイサイトからなる由良石は熱に強く加工しやすいことから、かつて採石が盛んに行われていました。年号入りの由良石製品で最も古いものが清水神社と蓮勝寺の境内にある手洗石



採石場跡

で、ともに元文二年（一七三七）と刻まれていることから、採掘され始めたのは、江戸時代中期頃と考えられます。最初は、地元の人たちによって山の数箇所に採石場がつけられ、主に石垣や住宅の基礎石として近隣地域で使用されていました。江戸時代末期になるとしだいに製品も多様化し、墓石をはじめ社用の燈籠等が盛んにつくられるようになりました。近隣の墓地にはこの時代の墓石が多く見られます。また、幕末には内伝秀蔵ないでんひでざうが由良石で多くの作品を製作しています。

明治から大正期にかけては耐火性に優れているということから、土地造成の石垣や建物基礎石に欠かせないものとなり、墓石と並んで大きな役割を果たしてきました。そのほか、唐臼・碾臼・餅臼など生活必需品などの製品も作られるようになりました。また、由良石特有の暖かい温もりで、淡青色と淡褐色の落ち着いた色合いから受ける上品な感覚は建築材料として急速に人気が高まり、東京帝国ホテル、歌舞伎座、東京帝国大学附属病院、名古屋市役所等で多量に使用されました。地元を中心とした土木資材から建築装飾資材



清水神社手洗石（元文二年銘）

からうす
ひきうす
唐臼・碾臼・餅臼

として広く全国的に評価されたのです。

しかし、昭和一四年（一九三九）頃から戦時色が濃くなり、若い石工は軍隊に招集されたり、軍事工場に徴用されるなどし、採石は一時衰退しました。

戦後になると、荒廃した国土の復興に石材が多く用いられ、採石場や石工が激増し、再び活気を取り戻しました。最盛期の昭和三五年頃には由良山に四〇事業所があり、従業員数は百名を越す勢いでした。このような情勢の中で、生産・流通の近代化が一挙に進められ、槌つちの代わりにエアハンマー、大八車に代わって大型トラックが利用されるようになりました。特に東讃方面の河川改修に多量の石材を要し、同時に民間住宅の建築が増加しました。

由良石の歴史の中で欠かせない画期的な大事業が、皇居東庭（宮殿広場）約一万五千㎡の敷石施工です。由良石特有の淡青色と淡褐色の二色が織りなすモザイク模様が平和を象徴する色彩としてぴったりであること、敷石の上を歩行する際のタッチが非常にソフトであることが高く評価され受注が決定しました。昭和四一年一月二日に採石場において新宮殿造成用採石奉告祈願祭の神事が行われ、大事業の槌入れが行われました。近代化を進めるとともに優先集中生産体制に全山が結集し、昭和四三年に竣工しました。

しかし、戦後三〇年間の採掘量は由良石全採掘量の八〇パーセントになり、良質な石材が採り尽くされ、生産量が激減するとともに、輸入石材の増加、コンクリート業界の躍進等により採石業は衰退の一途をたどりました。

5 やまがみ 山神神社

由良山の北側山腹に所在する神社で、「山の神さん」と呼ばれています。露出した大きな岩盤そのものが御神体となる磐座として信仰されています。祭神は大山祇神です。

神社の前には高松飛行場空襲犠牲者の慰霊碑があります。昭和一九年（一九四四）の高松飛行場建設に伴い、由良山にも山麓から中腹にかけて数多くの塹壕さんごうや防空壕が掘られ、山上には高射砲が設置されるなどの要塞化が図られ、飛行場の戦闘機を隠すための掩体壕えんたいごうや誘導路等の整備も行われました。終戦直前に



防空壕

は全山が軍によって支配され、本土決戦に備えていましたが、これらの施設は敵機の攻撃目標となりました。昭和二〇年七月二四日の高松飛行場空襲では一四人の民間人に死者が出ています。そのうち、九名が由良山北麓において勤労奉仕で滑走路用の栗石を採取していた際に、機銃掃射によって亡くなりました。慰霊碑は地元有志によって建てられたもので、犠牲者の三三年忌に当たる昭和五二年七月二四日に除幕式が行われました。

6

自性院跡

じしょういん

由良山の山麓清水神社の北東が寺院跡です。雨寶山うほうざん自性院そうごんじ莊巖寺と称し、西植田町の神内池にあった真言宗吉國寺の末寺で、本尊は千手観音でした。寺記には、「當寺は大同三年（八〇八）正月伊豫親王に勅して建立あり、好井社の社僧となし、祭田を賜ふ。其の後承和八年（八四一）大旱たいかんありし時、當國の勅使高公輔こうこうすけ、眞雅僧正しんが（＝空海の弟）に乞ふて雨を好井社に祈る。」と記されています。

明治維新の際に院主榊原氏は清水神社の祠職となり、自性院は廃寺になりました。

7 清水神社

景行天皇五四年の創祀で、古くは好井よし社と称され、山頂のやや東にあつたとされます。景行天皇の皇子で、讃岐国造くこのみやつこの始祖とされる神櫛王かんぐしおうを祀っています。永祿三年（一五六〇）に田井城主長尾清長が東側中腹に復興し、由良社と改めたとされています。

江戸時代には藩主松平氏の尊崇厚く、国中十ヶ寺で祈願をしても雨が降らない時は、当社で祈願したとされます。むかし、清水神社では祭礼の際に甕かめ一二口で御神酒を作ってお供えをしていたと言われています。別当寺であつた自性院じしやういんの記録によれば、承和八年（八四一）は大旱魃かんばつ



清水神社

で、国司の命により雨乞いを行うことになりました。雨乞い神事の際に神櫛王ゆかりの甕を使って祈ったところ大成功したと言われています。その後、天正年間（一五七三〜九二二）に長宗我部元親の兵火に会い、一二個の甕のうち三個を残して社殿は焼失したとされます。残った甕を里人たちは大切にお守りしていましたが、今度は風水害にあつて一個を破損してしまい、残った二個の甕を本殿南側の甕塚に納め、再建した清水神社の本殿床下に破損した甕を埋めたとされます。雨乞いの際に、かみみたらい 上御盥、なかみみたらい 中御盥、しもみみたらい 下御盥から神水を取り、甕を洗えば必ず雨を得ますが、甕を洗った者は必ず亡くなるという伝承があります。

他に例を見ない神事に使われるということで、昭和五六年（一九八一）に高松市指定有形民俗文化財となりましたが、昭和一九年を最後に神事は行われておらず、永ら



甕塚

くその実態は不明のままでした。しかし、清水神社宮司が神事及び甕塚の詳細について後世へ正しく伝承するため、甕塚の甕を発掘し神事を行い記録として残したいということから、平成二四年（二〇一二）二月一八日に氏子の協力のもと甕の発掘を行いました。

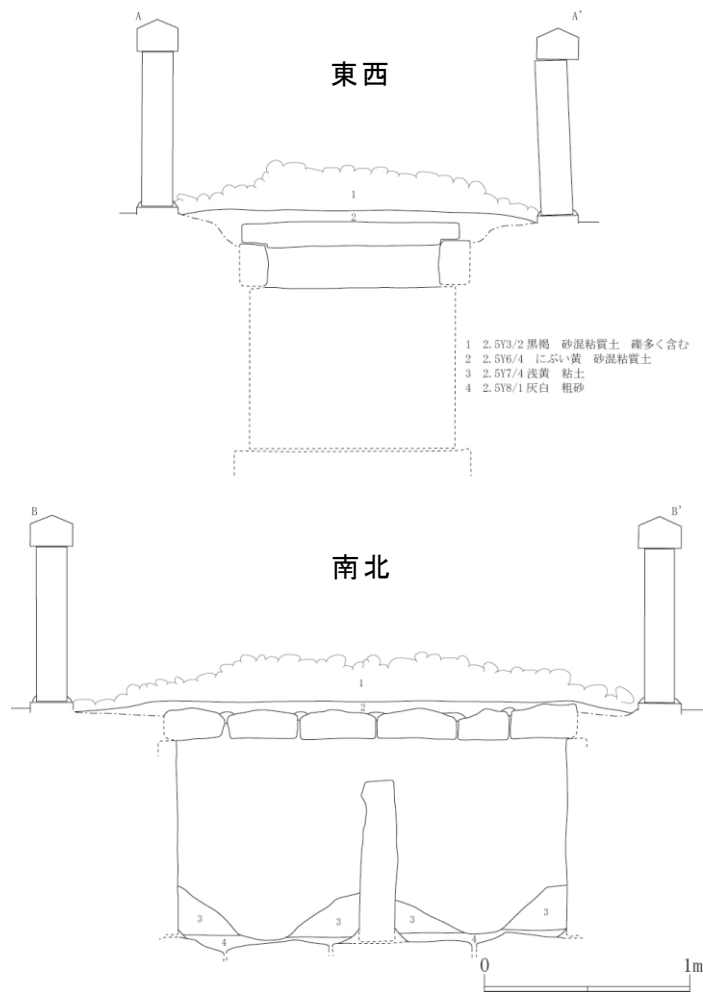
甕塚は清水神社の拝殿の南に所在します。高さ九六cmの玉垣で長方形に囲まれており、拳大の円礫を集積し、東西一・七七m、南北二・七四m、高さ二五cmを測ります。円礫の下部では由良石の板石で構築された竪穴式の石室を検出しました。石室内部は東西九三cm、南北一・八〇m、



甕塚石室内部

高さ一mを測り、中央に板石が立てられ、南北二室に分かれています。北側は東西九三cm、南北八七cm、南側は東西九三cm、南北八四cmを測ります。

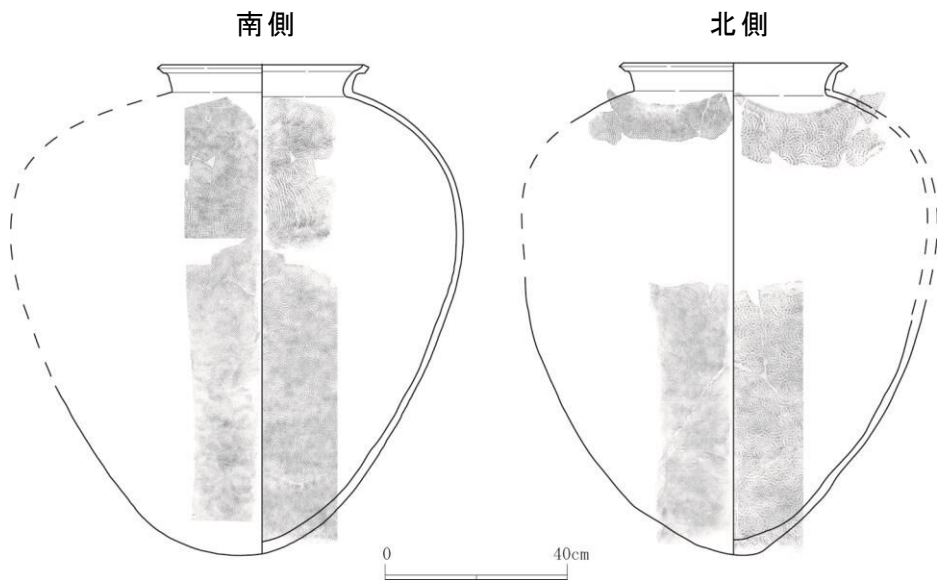
南北両方の石室の底面において甕の底を検出しましたが、甕が倒れないよう石室の底部分には粘土が充填されていました。また、甕内部は甕の破片が散乱した状態でした。南側石室に納められていた甕は、やや肩が張った卵形の体部に、短い外反する頸部^{けい}がついており、口縁部はやや肥厚させて



甕塚断面

います。器高一〇七・六cm、口径四四cm、体部最大径九五cmを測ります。外面には格子目叩き、内面には同心円状の叩きの当て具痕が認められます。北側石室の甕は破片が少なく、体部下半（現存高六五cm、体部最大径八七cm）と頸部のみが残っています。残存部分から推定すると、南側の甕よりはやや細身となると思われますが、ほぼ同様の形態になると予想されます。いずれも七世紀頃の須恵器の甕と考えられます。このように七世紀までさかのぼる伝世品が存在したことは、神社や地域の歴史を考える上で重要な発見と言えます。

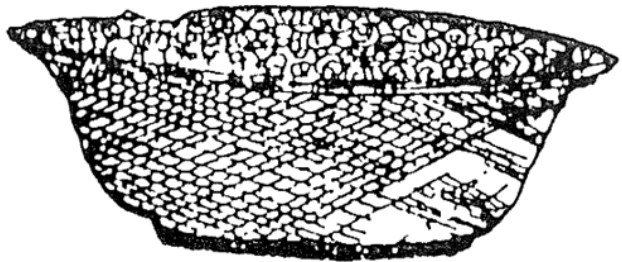
甕は多数の破片となっていますが、概ね下部三分の一が完形で残っていたと考



甕実測図

えられる状況で出土しました。ほぼ同じ高さで残っていること、割れ口が他の破片の割れ口と異なり摩耗が著しいことから、意図的に下部三分の一とした可能性が考えられます。一方、破片数は少ないですが、南側の甕では口縁部から底部まで接合関係が確認できており、本来は完形品であったこともうかがえました。当初完形品であったものが、ある時期に破損したため、下部三分の一のみで雨乞いを行うようになった可能性が考えられます。幕末の『讃岐国名勝図会』では平底の皿鉢状に描かれています。外周は格子状、内面に同心円状の模様が描かれており、格子目タタキと同心円の当て具を表現したものと考えられます。甕の下部三分の一の形態は丸底鉢状ですが、この点を除けば甕下部の状況を描いたものと理解でき、幕末には下部三分の一で雨乞い神事が行われていたことを示唆します。

調査後の平成二四年三月二五日に雨乞い神事が執り行われました。神社拝殿中央に甕を祀り、本殿に捧げてあった上御盥跡から取水した神水を宮司が柄杓に取り、水をかけて洗うしぐさを行いました。神事後、五月三日に氏子の協力のもと甕の再埋納が



『讃岐国名勝図会』に描かれた甕

行われました。

清水神社は「甕洗い神事」が有名ですが、それとは別に、「お火上げ神事」と呼ばれる雨乞い行事があります。むかしは毎年旧暦の五月三〇日の夜、多くの里人が雨乞いと五穀豊穡を祈りながら由良山頂上の竜王社を目指し、手に松明をかざして上りました。竜王社に着くと神官が
はらえ
大祓の儀式を行い、それが終わると集められた青松葉に火がつけられ、赤々と天をも焦がす大炎をつくりました。現在は山頂での焚き火は取りやめています、八月第一土曜日の夜に神事が行われます。

このほか、神社境内には雨乞いに関わるものとして、本殿に安置されている



平成 24 年の神事の様子

呼雲の龍、玉垣に見られる逆巻く怒濤^{どうとう}と玉取りの龍、甕塚近くの剣巻龍などが見られます。いずれも幕末の石工内伝秀蔵の作です。秀蔵は西浜村出身で、少年時に牟礼の石工、仁平に弟子入りをして腕を磨き、後に京都に出て絵を学び、三〇歳で讃岐に帰ってきました。安政五年（一八五八）松平頼該^{よりかね}（左近）の紹介で自性院^{じしやういん}に身を寄せ、由良山の南裾に住居を構えました。上記の作品のほか、正一位清水大明神碑、浪上の亀（いずれも清水神社）、一力地藏・十河氏累世慰霊碑（いずれも南原墓地）等数多く残されています。ちなみに、上御盥^{かみみたらい}の標柱の龍の彫刻は、秀蔵の長男新蔵の作です。



逆巻く怒濤と玉取りの龍

8 由良山城跡と由良城跡

由良山山頂に由良山城があつたとされますが、高射砲台座に伴う成形と採石のため、遺構は確認されていません。また、山の東麓に平時の居館である由良城があつたとされます。城主は三谷氏に属した由良遠江守兼光かねみつで、出自ははっきりしません。一説に三谷景久かげひさの弟兼光が由良に領地を得て由良伊豆守を称し、その子兼広が遠江守を名乗ったとも言われています。

『南海通記』など文献史料には多く残っていますが、華々しい戦いはなかったようです。永正五年（一五〇八）、三谷攻めに向かう香西元定の軍勢二五〇〇人が、由良山城に押し寄せました。城主三谷伊豆守は、弟掃部左衛門かもんが香西氏と縁続きであつたので、戦うことなく開城しています。天正一〇年（一五八二）には、長宗我部元親の大軍に対して、城兵三〇〇人余では防ぎきれず、城を捨て敗走しています。さらに、豊臣秀吉による四国出兵の際にも屋島方面から南進してきた黒田官兵衛軍に対して、城を捨て逃げ去っています。

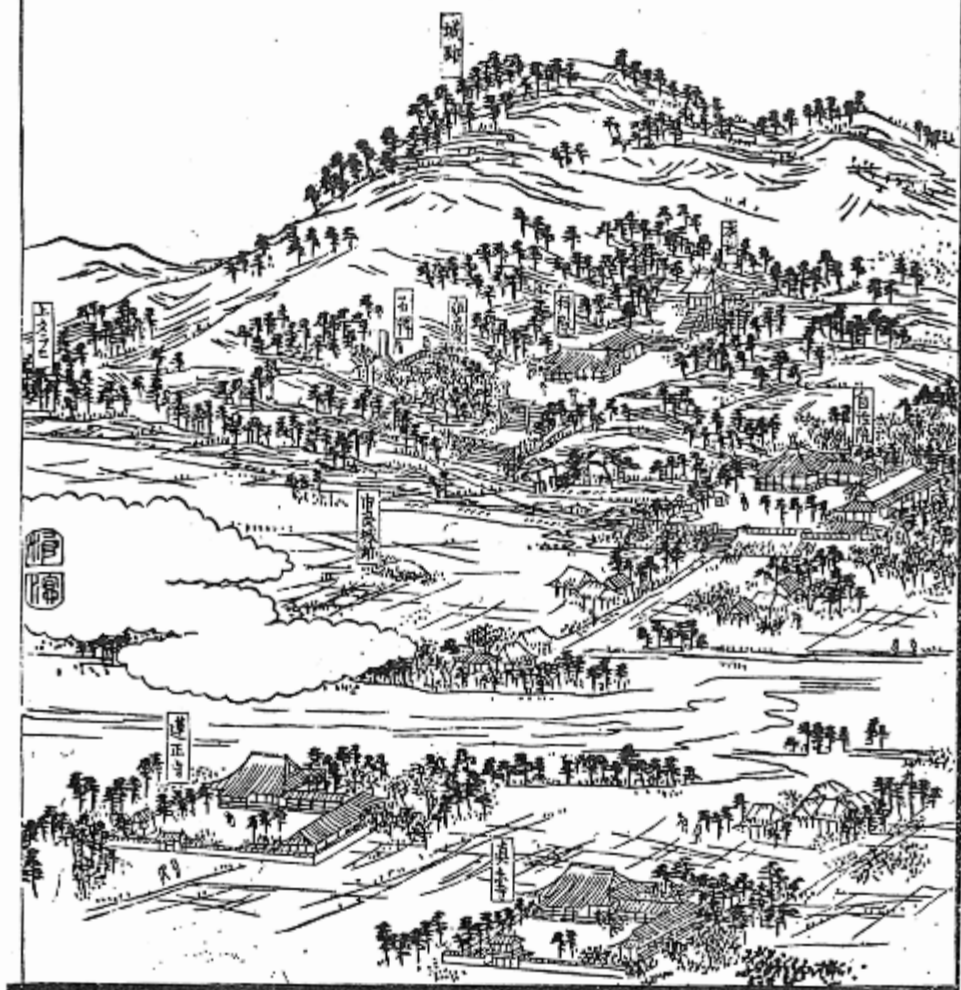
なお、その後讃岐一国を賜った生駒親正いこまちはまさは、城地の選定を行う際に由良山をその候補地としましたが、水が乏しいという理由から築城はされませんでした。

参考文献

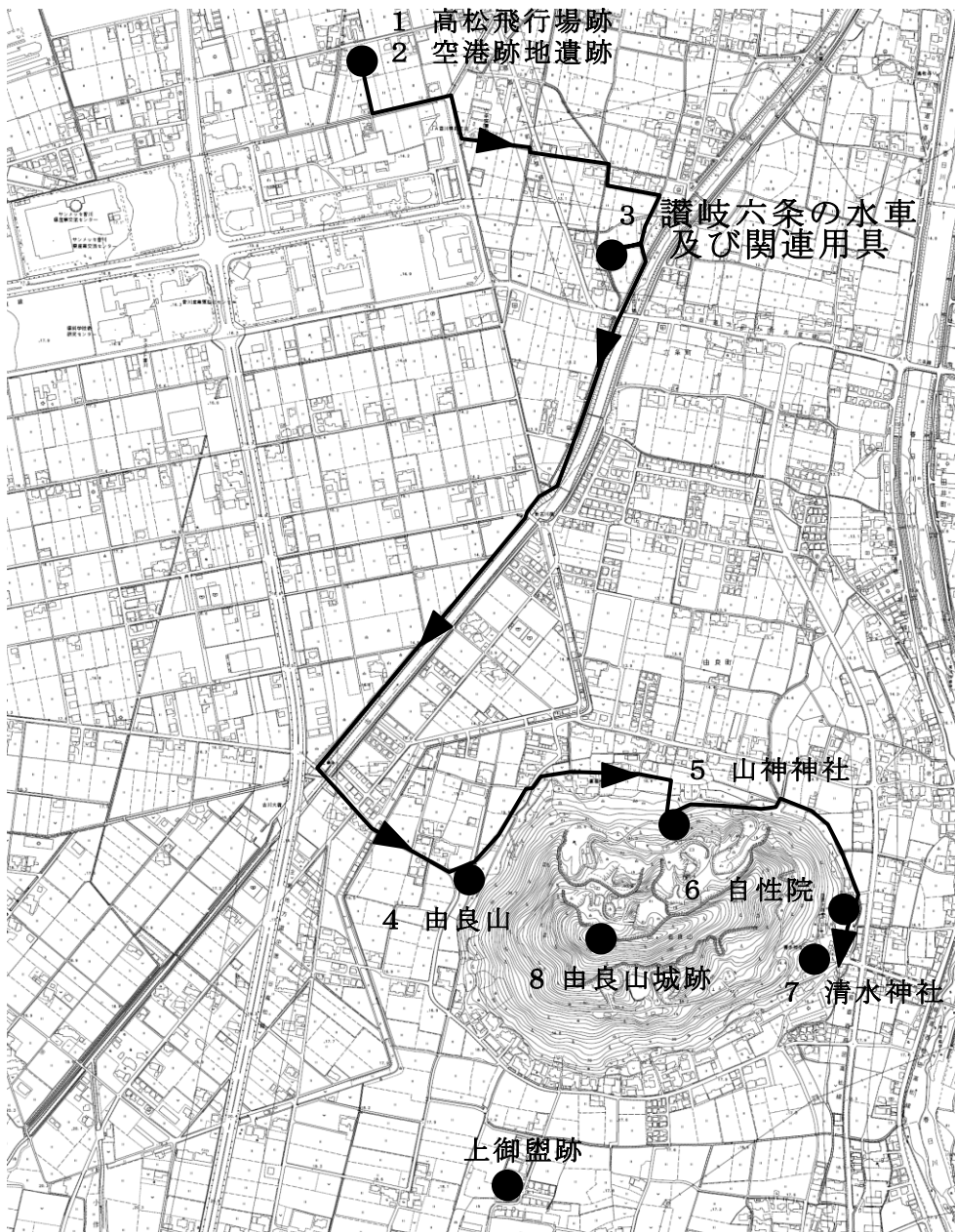
- 秋山忠 一九八二 『古城跡を訪ねて』 高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
大石道義ほか 二〇一五 「四国における現存最古の高原製粉精米水車場―歴史と敷地と水車の概要―」 『産業考古学会』第一五二号 産業考古学会
川島郷土誌編集委員会 一九九四 『川島郷土誌』
香川県教育委員会 一九九七 『空港跡地遺跡Ⅱ』
高松市教育委員会 二〇一六 『空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅰ）―第二次調査―』

由良神社
自性院
壺塚
由良城跡
蓮正寺
真樂寺

つて修き
はあけ外の
めうふえ
うふえりう
はあけ
武州
中郡
美成



幕末期の由良山周辺の景観（『讃岐国名勝図会』より抜粋）



12月18日（日）由良町からの復路

◆ことでんバス川島・西植田線乗り

（由良）	（瓦町）	（高松築港）	（高松駅）
11:45	→ 12:13	→ 12:21	→ 12:24 着
12:20	→ 12:45	→ 12:53	→ 12:58 着

次回のふるさと探訪は…

テーマ 中央公園とその周辺の野外彫刻を訪ねる（予定）

とき 平成29年1月22日（日）

9:30～12:00頃

集合場所 高松市役所 正面玄関前

講師 藤井 雄三 さん（高松短期大学講師）



☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」1月15日号に開催案内を掲載します
ので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、

文化財課（TEL839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）で
お知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ことでんバス（ショッピング・レインボー循環バス西廻り）

（高松駅）	（高松築港）	（高松市役所）
-------	--------	---------

8:45	→ 8:48	→ 8:53
------	--------	--------

◆琴平電鉄瓦町駅から徒歩約15分

JR高松駅から徒歩約25分

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※参加中は、次のことに充分留意し、
意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一行で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。